

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 計画

学校名	佐賀市立春日小学校
-----	-----------

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

1 前年度 評価結果の概要	・運営委員会や4部長会の機能を活かし部会運営を定着させたことで、学校の課題や達成目標を常に職員と共有化させながら、全体で目標達成の取組に繋げることができた。 ・「学校・学級の一員として役に立っている」と回答した児童が90％以上となり、居心地のよい学級風土づくりを全校体制で推進することができた。「きらり発見活動」などの取組を継続し、「温もり」をキーワードとした、他者への思いやりの心や自己有用感を育む教育を充実させていきたい。 ・保護者や地域の方との連携を重視した学校運営により、感謝や激励の言葉、並びに高い評価を受けた。今後も、改善に向けた意見等については真摯に受け止め共に改善策を検討しながら、地域に関われたよりよい運営に努めたい。
------------------	--

2 学校教育目標	自分から かんがえ すなおに がんばる 春日っ子の育成 ～温もり～
----------	-----------------------------------

3 本年度の重点目標	① 児童が主体的に学び「わかった」「できた」に喜びを感じる授業づくり努め、生きる力の育成と学力の向上を目指す。 ② 周囲の人やものを大切にできる温もりのある学級・学校づくりを目指す。 ③ 目標に向かって失敗を恐れずあきらまないでチャレンジするたくましい心と体をもつ児童を育成する。 ④ 家庭・地域との連携を図り、安全に安心して生き生きと活動できる学校づくりを進める。
------------	--

4 重点取組内容・成果指標				中間評価		5 最終評価				主な担当者
(1)共通評価項目										
重点取組				中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○児童が主体的に学び「わかった」「できた」に喜びを感じる授業づくりに努め、生きる力の育成と学力の向上を目指す。	○「何を問われているのか(聞かれているのか)を考え、それにあった考えを自分なりに書いたり、見直したりすることができていると思う」に肯定的に回答した児童80%以上	・児童の発達段階や理解の程度に応じた手立てを講じ、常に考えや答えを問い直す姿勢を大切にさせながら、主体的な学びにつながる自分の考えを書いたり、見直したりする活動を取り入れた授業づくりに取り組む。	A	・7月の中間アンケートでは「何を問われているのか(聞かれているのか)を考え、それにあった考えを自分なりに書いたり、見直したりすることができていると思う」に肯定的に回答した児童が、低学年は87%、中学年92%、高学年97%であり、全体としては92%であった。前述の具体的取組により、多くの児童が成果指標に挙げた内容を意識し、実行できていることが分かった。具体的取組が有効に働いていることが分かったので、これからも継続して取り組んでいく。	A	・12月の最終アンケートでは「何を問われているのか(聞かれているのか)を考え、それにあった考えを自分なりに書いたり、見直したりすることができていると思う」に肯定的に回答した児童が、低学年は89%、中・高学年は91%であり、全体としては90%であり、成果指標を上回ることができた。	A	・授業参観では、タブレット端末を使って、自分の将来について調べ、いつどのようなことに取り組むかまでまとめる発表しており、すばらしかった。 ・数値目標は達成されているが、今後は学習状況調査等の分析を活かして、学校としての課題に取り組んでいく必要がある。	学習指導部
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「相手のことを考えた、挨拶・返事・言葉づかいができています。」の項目で、「できている・だいたいできている」と回答した児童・保護者の割合90%以上	・生徒指導協議会で全校児童の状況を共通理解し、全職員で手立てについて考え、共通した指導を行う。 ・児童による委員会(生活委員会や温もり委員会など)と連携しながら進める。 ・職員による「きらり発見活動」 ・月ごとに生活のめあてを決め、全校で意識的に行う。	B	・月に一回、生徒指導協議会を行い、全学年の気になる児童を共有することで学校全体で児童対応できるようにしている。 ・生活のめあての内容に沿って、廊下に中央線を引き右側歩行を促した。また、掃除時間の前にオルゴールを流し、立腹してから掃除を行うことで無言掃除を目指した。 ・相手の気持ちを考えていない言動が見られる。いじめ・命を考える日の取り組みや人権集会、「きらり発見活動」を通して、継続的に指導していく。	B	・12月のアンケートでは、「元気がよく挨拶をすることができていますか」の項目に、肯定的な回答した児童は86%。「ほかほか言葉を使うことができていますか」の項目に、肯定的な児童は89%であった。また、「お子さんは、挨拶や返事の習慣がついていますか」の項目に肯定的な回答をした保護者が89%。「お子さんは、場に応じた言葉遣いや相手のことを考えた言葉遣いができていますか」に肯定的な回答した保護者が80%であった。	B	・公民館等で大人に対して、正しい言葉遣いをしている子供もいる反面、子供同士の会話を聞いていると乱暴な言葉も使っており、言葉遣いには課題を感じることもある。 ・朝の挨拶運動では、子供たちの方から元気な挨拶をしてくれるようになってきている。 ・学校と地域では、子供たちが見える姿も違っていることもあるだろう。	生活指導部
	●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○「いじめをされたり見たりした時に、周りの人にすぐ相談できる」の項目で、「できるといいたいできる」と回答した児童の割合90%以上、また「できないかもしれない」と回答した児童には、聞き取り等の対応を行う。 ○「学校生活を楽しんでいる・学校はいじめ防止に取り組んでいる」の項目で、「そう思う・ややそう思う」と回答した保護者の割合90%以上	・「いじめ・いのちを考える日」の取組の充実 ・「QJアンケート」や「すっきりニコニコアンケート」を実施し、児童理解を行う。実施後は早期にヒアリングを行い、いじめの早期発見・早期対応を行う。 ・保護者の相談に迅速に対応する。 ・レインボー作戦のポスターを各学級に掲示し、日ごろから授業などの時間を使って活用し、子どもたちに意識付けできるようにする。	B	・「いじめ・いのちを考える日」は、いじめと人権についてやジェンダー、戦争と平和についてを取り扱い、人権に対する意識を高めた。 ・「すっきりニコニコアンケート」は、気になった事案に関して学級担任が聞き取りを行い早期対応を目指した。生活指導と教育相談担当、また管理職で気になる事案については確認している。 ・レインボー作戦のポスターを、各学級の決められたところに掲示を行い、始業式ではレインボー作戦についての振り返りを行った。	B	・12月のアンケートでは、「いじめをされたり見たりした時に、周りの人にすぐ相談できる」で「できるといいたいできる」と回答した児童は全体で80%であった。 ・QJやすっきりにこにこアンケートを行い、いじめの早期発見・対応に務め、児童が相談しやすい環境を整えている。 ・「学校生活を楽しんでいる・学校はいじめ防止に取り組んでいる」に「そう思う・ややそう思う」と回答した保護者は92%と肯定的な回答が多かった。	B	・最近のいじめの内容が様変わりしていており、ネットゲームやSNSなど家庭で対応する必要がある中、学校としてできる取り組みはよく行われている。 ・子供の些細な行動にも気付き、指導がなされており、子供をよく見て丁寧な対応をしてもらっていると感じる。
●健康・体づくり	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・児童生徒の資質・能力を育む授業づくりに関する校内研修等の実施 ・各種体験活動では、児童生徒に活動の見通しと学びの振り返りを行う活動を仕組む。 ・授業だけでなく、教育活動全体で生徒指導の機能を生かした取り組みの実践	B	・将来の夢に関する活動を実施した。 ・縦割り活動では、全学年に活動の見通しを持たせるために、掲示板の活用をしている。また、活動終わりに全学年で振り返り活動を行っている。 ・遠足やワクワクオリンピックなどの行事のタイミングで、児童のよい行動を全校に知らせる機会をつくった。	A	・全校で90%弱の児童が先生たちが良いところを認めてくれていると回答した。 ・全校で約80%の児童が将来の夢や目標をもって過ごすことができている。 ・全職員が児童に対し、他者を思いやる指導を授業やその他の教育活動において実施することができている。	A	・2年生の町探検では、子供たちが話をよく聞いており、質問する内容もしっかりしていた。春日保育園へ町探検に来た子ども、自分たちの成長を感じながら新たな気持ちで見ることができていた。 ・4年生の未来予想図では、自分の将来の夢や具体的な取り組みまで調べ、発表することができていた。	特別活動部
	○性教育を中心とした、ジェンダー教育への意識の向上	○「ジェンダー教育に対する意識が高まった。」と感じる職員80%以上	・「性に関する指導計画」を基に、発達段階に応じた性に関する授業を2本以上行う。	B	・プールの授業の前にプライベートゾーンについての指導を行っている ・学校が5割以上あった。性やジェンダーについて取り扱っていない学級もあるため、教材の提案を行い、職員の意識が高まるようにしていく。	A	・ジェンダー教育に対する意識が高まったと肯定的に回答した職員が96%であり、全てのクラスが性やジェンダーに関する内容を2本以上取り扱うことができた。今年度は全校同時期にジェンダーに関する授業に取り組むこともでき、職員の意識の向上が見られた。	A	・子供たちが多様な性について、閉鎖的にならないように取り組む必要がある。 ・先生方も全クラスで授業に取り組んでいることが良い。 ・先生方のジェンダーに関する意識も高まっている。	保健安全部
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・繁忙期等を鑑み、日々の目標施設時間を設定し、時間を意識した働き方を行う。 ・会議の精選と資料のデジタル化等の業務効率化、業務削減など、業務改善を推進する。	B	・金曜日を提示退勤日と設定して、退勤を呼び掛けている。45時間～80時間の超過勤務の職員が一定数あり、金曜日も定時退勤ができない日もあった。業務内容に軽重を付け、定時退勤を促す。 ・会議資料はデジタル化ができている。	B	・45時間～80時間の超過勤務の職員が月平均25%あり、意識調査においても、19%が勤務時間外での削減に務めることができなかったと回答した。定時退勤の呼び掛けだけではなく、学年間での業務の分担等を行い勤務時間の削減を目指していく。 ・会議資料のデジタル化に加え、いじめや体罰、学校評価等のアンケートはWeb上でを行い、集計等の手間を省くことができた。	B	・授業の準備や丸つけなど経験の少ない教職員が時間がかかっているとのことであるが、超過勤務が多い職員をみんなでもサポートしていただく取組は良い。 ・教職員のメンタルヘルスを大事にしてほしい。
●特別支援教育の充実	○職員のやりがいが高まる業務改善案の策定と共通理解・共通実践	○「働きがいを感じる」について肯定的な回答をした職員85%以上	・運営委員会、専門部会等で改善案を検討し、チーム意識を向上する。 ・職員会議、連絡会等で共通理解をし、共通実践を行う。	B	・専門部会においては、前年度踏襲ではなく、学校行事や集会等において新たな実践に取り組むことができた。 ・職員会議や連絡会においては、各部の部長や教科担当者から、情報共有がなされて実践に取り組んでいる。	A	・運営委員会において超過勤務の実態について共有し、業務改善の方策を考えた。ICT活用の意見をもとに、夏季休業中の職員研修において、学年毎に授業で使えるデータを整理し、共有することができた。 ・連絡会や運営委員会では、児童等の情報共有を行い、学年を超えて協力できる事を考えたり、共通実践すべき内容を確認したりすることで、学校全体のチーム意識が向上した。 ・「働きがいを感じるための取り組みを進めることができた」と肯定的に回答した職員が、97%であった。	A	・業務は大変だろうが、働き甲斐があるという教職員が97%と高く、すばらしい。 ・ありがとう集会では、子供はもちろん先生方が笑顔で楽しんでいる様子が大変よかった。 ・問題点をみんなで共有し、考えていくといと感じる。	教頭・主幹教諭・ 教務主任 専門部長・学年主任
	○特別支援教育に関する教員の専門性と意識の向上	○特別支援教育に関する専門性が向上したと回答した教員90%以上	・特別支援教育に関する研修会の実施 ・ケース会議の開催、関係者間での情報共有	B	・特別支援教育コーディネーター(本年度4名)を中心に情報を収集し、支援のあり方や体制について共通理解を図り、研修を計画する必要がある。 ・情報交換会であがった事例や児童、担任等の気づきで心配な様子が見られた児童についてケース会議(7回)、連携会議(6回)、拡大会議(2回)を行った。会議後、回覧・連絡会で共通理解を図っている。また、支援員とも連絡を取り合い、支援を必要としている児童・学級集団への配置を考えている。今後は個別の指導計画記入児童について検討する必要がある。	A	・12月のアンケート結果より特別支援の体制を充実させることができた」と回答した職員が約97%であった。 ・情報交換会を毎月1回実施した。気になる児童については、定期以外に連絡会で共通理解をしたり、普段から情報交換がなされたりしていた。 ・自立活動や神経発達症治療薬についての研修を実施した。また、個別の指導計画記入について早期に提案した。 ・後期は、ケース会議2回、連携会議5回、拡大会議1回、教育支援委員会7回、特Coによる保護者面談8回を行った。年間延べ70名の児童に対する意見交換をした。	A	・特別支援学級が増加している現状より、丁寧な支援が必要である。 ・保育園でも特別支援的な配慮が必要な園児が多くなっており、小学校においても同様に配慮が必要な子供が増えていると思われる。	生活指導部
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目										
重点取組				中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
◎児童の自己有用感の向上	◎児童が、本校の一員として目標をもとめ、その実現に向けて、意欲的に取り組もうとするための教育活動	◎「学校・学級の一員として役に立っている」について肯定的な回答をした児童80%以上	・各活動の目標の共通理解とその支援 ・各種体験活動における活動の見通しと学びの振り返り(児童一人一人の役割と承認) ・職員による「きらり発見活動」	B	・低・中学年においては、異学年と交流活動を行うことで、承認の場を作った。また、相手意識をもった活動ができるように、日常的に委員会活動を活用化させており、今後も継続していきたい。職員の「きらり発見活動」を活性化し、よい行いをしようという機運を高めていく。	A	・全校で95%の児童がかけがえのない当番の仕事に進んで取り組むことができた。 ・職員・児童に対して、体験活動や縦割り班活動、「きらり発見カード」などを活用して、自己有用感を高めることができた。	A	・全体の底上げができるよう、これからも取り組んでいく必要がある。	特別活動部
○家庭学習の習慣化	○各学年目標時間を意識した家庭学習の定着	○家庭学習の各学年の目標時間を達成できたと肯定的に回答する児童80%以上	・家庭学習ががんばり週間」の定期的な実施とその振り返りさせ、結果を全職員で共有する。 ・「家庭学習ががんばり週間」の結果の共有や親子での振り返り等家庭と連携し、達成に向けて学校と家庭の両方からアプローチしていく。	B	・7月の中間アンケートでは「家庭学習の各学年の目標時間を達成できた」に肯定的に回答した児童は、低学年では77%、中学年89%、高学年87%、全体としては84%で数値目標を達成している。しかし部分的に見ると、低学年は数値目標に対して低い結果が出ているので、改善のための手だけや声かけをしていく必要がある。 9月、2月実施の「家庭ががんばり週間」で、児童とともに家庭の意識の更なる向上を図る。	B	・12月の最終アンケートでは「家庭学習の各学年の目標時間を達成できた」に肯定的に回答した児童は、低学年では69%、中学年83%、高学年86%、全体としては79%で成果指標の80%に1%届かなかった。低学年への更なる働き掛けが必要である。	B	・低学年は放課後児童クラブに行っているため、宿題等を学習クラブで取り組んでいる子供も多く、それを家庭学習と捉えていない子供もいるのかもしれない。 ・高学年は中学校へ向けて、自分で学習することへの働き掛けが必要である。	学習指導部

5 総合評価・ 次年度への展望	・毎月の4部長会や専門部会、運営委員会が定着し、学校の課題を共有したり、学校目標達成に向けた取組について検討・実践したりすることができた。次年度も、児童の課題や達成目標を可視化しつつ、全職員で方向性をそろえ、PDCAサイクルのもと具体的目標の達成を目指していく。 ・「学校・学級の一員として役に立っている」と回答した児童が95％となり、年々達成率が上がり、児童の自己有用感の向上が見られている。一方、「相手のことを考えた、挨拶・返事・言葉遣いができているか」の項目に関しては、目標達成には至らず、学校目標である「温もり」ある学校にするために、相手の思いやりの心の育成に取り組んでいきたい。 ・保護者アンケート等において、多くの感謝と激励の言葉をいただいた。これを励みに、次年度もよりよい学校運営に努めていきたい。また、改善を求める意見については真摯に受け止め、解決策を検討しながら取り組んでいく。
--------------------	--